

聖書：士師記 21：1～25

説教題：ただ恵みによって

日時：2015年3月22日

士師記の最終章となりました。この21章は19章、20章と一つながりの記事です。簡単におさらいしますと、まず一人のレビ人がベニヤミンの町ギブアに泊まったところ、人々がその家を取り囲みました。彼らは旅行者であるレビ人を同性愛の対象にしようとしませんが、レビ人が一緒にいたそばめを外に出すと、人々は彼女を夜通し暴行し、彼女は結局死んでしまいます。レビ人はその死体を12の部分に切り分けて、イスラエルの各部族へ送りました。これを受け取った12部族は激しいショックを受けて集まり、ならず者たちを引き渡せと要求しますが、ベニヤミン族はそれを拒否します。こうして内戦が始まります。その結果、ベニヤミン族は敗北し、たったの600人が生き残っただけとなりました。その他の家畜も持ち物もすべて破壊されたのです。

こうして勝利を取めたイスラエルが今日の章で泣いています。戦っている最中とはにかくベニヤミンを倒すことに躍起となっていました。終わってみると「大変なことになった！」と気付く。このままではベニヤミン族が消滅し、イスラエルは12部族でなくなってしまう。これと関係するのは、1節にあるように、戦いに臨む際に「私たちはだれも娘をベニヤミンにとつがせない」と誓っていたことです。しかしベニヤミンで生き残っているのは男子だけで、女性はいません。このままでは彼らはイスラエルから消滅してしまいます。そこで民はベテルに来て、神の前で激しく泣きます。「イスラエルの神、主よ。なぜイスラエルにこのようなことが起こって、きょう、イスラエルから一つの部族が欠けるようになったのですか。」そしていけにえをささげて、主に導きを求めました。しかしこれから先を読む上で押さえておきたいことは、今日の章には主からの直接的な答えは何も記されていないということです。

そんな中、彼らに一つの解決策が浮かびます。それは5節の「戦いのために集まって来なかった者は必ず殺されなければならない」というもう一つの誓いと関係します。点呼してみると、ヤベシュ・ギルアデの町からは兵士が来ていませんでした。そこで一石二鳥の案が急浮上します。ヤベシュ・ギルアデの人々はこの戦いに上って来なかったのですからさばかれなければなりません。どんなことをされても彼らは文句を言えない立場にあります。だからその町を攻め、そこから男を知らない若い処女を連れ出してベニヤミンに与えれば良いという案です。ヤベシュ・ギルアデはミツパに集まって来ませんでしたから、「娘を嫁がせない」という誓約には加わっていません。ですからその娘たちならベニヤミンに与えることができます。そこでイスラエルの会衆は1

万2千人の兵士を送ってヤベシュ・ギルアデを打ち、400人の処女を連れて来て、ベニヤミンに与えたのです。

私たちはこれをどう評価すべきでしょうか。イスラエル人は誓約を破らずにベニヤミン族を助けようとしています。誓いを果たそうとする態度はもちろん大切なことです。しかし一つの誓いを守るために別の悪を行うことは正しいでしょうか。前に11章のエフタの誓願の箇所で見ましたが、私たちの誓いは絶対的なものではありません。なぜなら私たちは愚かな誓いをする場合があるからです。分かりやすいのはマルコ7章のコルバンの話です。イエス様は、ある人が父母に差し上げるべきものはコルバンになりました、すなわちささげものになりましたと言って、両親のために何もさせないようしていると批判されました。私はこれを神にささげると誓ってしまったので、残念ですがお父さんやお母さんに差し上げることはできないのですという言い訳をしている、と。そういう誓いは認められないとイエス様は言われました。なぜならその誓いは、十戒の第5番目の戒め「あなたの父と母を敬え」を破ることだからです。自分が勝手にたてた誓いのために、神がはっきり示している戒めを無視しているからです。ですからそういう愚かな誓いをしていたことに気付いたなら、軽率な誓いをした自分を大いに反省し、悔い改めて、その実行はとりやめにしなければなりません。誓ったからと言って、御心に反する道をなお進むことは、さらに罪を犯すことです。イスラエル人は良く考えるべきでした。一つの誓いを守っても、多数の人々を犠牲にしたなら、何の意味もありません。そうしてまでもその誓いを守って欲しいと神は思っておられません。なのにヤベシュの人々を犠牲にして自分たちは誓いを破らなかつたと胸をなでおろしている様は、彼らの心が全く主から離れていたことを示すものです。

イスラエル人はこうして400人の娘をベニヤミンに与えましたが、まだ200人足りません。そこに第2の案が浮上します。それは、毎年行なわれるシロの祭りで、踊りながら出て来る娘たちを略奪したら良いというアイデアです。これはどういうことでしょうか。簡単に言えばこういうことでしょう。イスラエルはベニヤミン族に娘を「与える」ことはできません。しかしもう一つ方法があります。それはベニヤミン族が「盗む」ことです。イスラエル人は与えたわけではなく、盗まれたのですから、とつがせた者はのろわれるという誓いには触れません。ベニヤミンが勝手に取ったのです。こうすれば私たちも呪われないし、あなた方も結婚できるとイスラエル人は提案した。一体何という解決案でしょうか。このようにすれば、誓いを破ったことにはならない、と考えるとは！

当然、娘を奪われた親や兄弟は反発し、嘆き悲しむに違いありません。しかし長老たちは、苦情が来たら22節のように説明するから心配するなどと言います。「どうか彼

らに情けをかけてやってください。彼らを許してあげてください。そうしなければあなたがたは彼らの結婚に関わり、ベニヤミン族に娘を嫁がせたことになり、誓いを破った者になってしまいますよ。罪に定められることになってしまいますよ。事はもう起こってしまったのですから、彼らが勝手に取って行ったということにしておあげなさい。そうすればあなたがたは罪に定められませんし、ベニヤミン族も子孫を残せませぬ。それが賢い選択ではないでしょうか。」と。大切な娘を奪われた親族たちが、このような説明で満足したとは思われませんが、もはや事態を変えることができない彼らは、無理矢理承服させられるしかなかったのでしょう。

こうしてベニヤミン族は自分の相続地に帰り、町々を再建して、そこに住みます。各部族も自分の相続地へと帰って行きます。一件落着です。しかし今日の箇所はこうして無事、12部族が欠けることなく守られた！ハッピーエンドだ！と語っているのでしょうか。大いなる皮肉は一人の女性が非人格的に扱われ、殺されたことに怒りを燃やしたイスラエル人が、自らの手で他の人を殺し、また多くの女性が非人格的に扱われることを許してほしいと提案して解決を図ったことです。彼らはレビ人のそばめがあのように扱われて死に至らしめられたことに義憤を覚えて、この悪は取り除かなければならない！と集まりましたが、その彼らがいとも簡単に他の命を奪い、また娘たちの略奪結婚に苦情を訴える人々に「まあまあそう言わないで」と言っている。これは全くチグハグな姿ではないでしょうか。言っている事とやっている事が矛盾していないでしょうか。色々騒ぎまくったイスラエルは、結局、どんな良い事をここに行ったのでしょうか。それゆえ士師記の著者は最後25節をこうまとめています。「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。」今日の箇所は決して肯定的に見られるべき箇所ではありません。イスラエルはこうして部族が欠けることなく守られた、だからめでたしめでたし。またそこに至るプロセスもこうなるためには仕方なかったのだから受け入れなさい、と私たちに納得を要求する箇所ではありません。むしろその反対です。イスラエルはこの問題を何とかしようもない方法で解決したことか！しかも民の指導者である長老たちがこのようにアドバイスした！誰も主の目に正しいことに歩んでいない。めいめいが、ただ自分の目に正しいと思うことに従って歩んでいる。士師記をここまで読んで来た私たちは、この最後を読み終える瞬間においても、深いため息をつかざるを得ないのです。そしてそれが士師記を正しく読んだ人の読み方でしょう。

私たちはどうでしょうか。私たちも今日の箇所のイスラエル人のように一見正しく生活しているかもしれませんが。彼らは兄弟ベニヤミンのために泣き、彼らの救いのために何とかしようと努力しました。誓いも破らないようにしました。悪をさばくこと

もしました。そしてついに目的を達しました。彼らは至って正しく行動したのではないのでしょうか。しかし今日の箇所は誰もが首を傾げずに読むことができません。なぜなら彼らの行動にはたくさんのクエスチョンマークがつくからです。目的に達しても、そこに至る行動が主の前に正しいものではないからです。同じように私たちもいくら一生懸命に生きても、主の目に正しく歩むのでなければ、この士師記と何も変わりません。私たちはそれで自分の目的を達成するかもしれません。良い結果に行きつくかもしれません。しかし今日の箇所を読む人が、最後にはため息をつかざるを得ないように、私たちも主の目に正しく歩むのでなければ、いくら人間の目にうまく行っても、ため息をついて振り返るしかない人生となるのです。

最後に士師記を読み終えるに当たっての唯一の救いは、イスラエルはこれで捨てられてしまわなかったということです。最後 25 節の言葉は、士師記の著者が次に来るイスラエルの王朝時代を経験している人であることを示しています。彼はそのことを知りつつ、この結びの言葉を書いたのです。この時代の後に王が与えられ、この混乱からイスラエルが引き上げられる時が来るということを。主はイスラエルを捨てず、なお導いて下さったということ。どうしてそんなことが起こり得たのでしょうか。その理由は一つ、それはただ神の一方的な恵みによってということでしょう。

士師記を通して思うことは、ここに描かれた民は神の祝福を受けるに値しない民であるということです。彼らは何度救われても逆戻りし、主に従いませんでした。むしろ螺旋階段を下るように「一層墮落して」という歩みでした。そんな彼らにはもはや最後の方では主も愛想を尽かして共におられないような感じでした。今日の章でも主はそこにいらっしゃらないようでした。イスラエルはもはや見捨てられ、行くがままにされたのでしょうか。しかし主はそこにおられたのです。主は黙っておられました。なおそこにいて下さった。ですから次の王の時代が来たのです。主はダビデ王による祝福をイスラエルに与えて下さったのです。そしてさらに神はダビデが指し示す真の王イエス・キリストをついに私たちに与えて下さったのです。私たちはこのような主の一方的な恵みによって今日を導かれている者たちです。私たちが何かをしたからではなく、ただ主の恵みによって今日の歩みがあり、導かれ続けている者たちであること思い巡らしてみるべきでしょう。

主は今日も苦しみ叫ぶ者たちに耳を傾け、御名を呼ぶ者たちをあわれんで下さる方です。士師記の中に示されて来た主のお姿を最後に 2 箇所、確認しておきましょう。2 章 18 節：「主が彼らのためにさばきつかさを起こされる場合は、主はさばきつかさとともにおられ、そのさばきつかさの生きている間は、敵の手から彼らを救われた。これは、圧迫し、苦しめる者のために彼らがうめいたので、主があわれまれたからであ

る。」 10章16節：「彼らが自分たちのうちから外国の神々を取り去って、主に仕えたので、主は、イスラエルの苦しみを見るに忍びなくなった。」主はこのようにあわれみをもって熱心に今日もご自身に立ち返るようと私たちに語りかけて下さっています。この書を読み終えた私たちの祈りは、主が今日も、このふさわしくない者たちを、なおご自身の恵みをもって導いてくださいますように！というものでしょう。何の祝福も受けるに値しない者を、あなたの限りないあわれみによって赦し、導き続けてくださいますように！というものでしょう。私たちは恵みの上にあぐらをかいてそのように言うのではなく、こんな者をなお心に留めて下さるお方の愛の神秘に打たれて、そう祈るのです。そのような主を心からの感謝と賛美を持って仰ぐがゆえに、今度こそ自分の目に正しい歩みではなく、主の目に正しく、主が喜ばれる道を歩めますように、そしてあなたが用意していて下さる天からの祝福に与ることができますようにと祈り、新しく与えられたこの週とこれからの歩みへ進んでまいりたく思います。